

「ほろむい七草」にかける夢～失われた湿原植生の再生・保全・活用をめざして

濱田 暁生

要 旨

かつて幌向原野と呼ばれていた北海道空知管内南幌町で、その地名を冠する7種類の植物があることに着目して「湿原植生の再生・保全・活用」に取り組んでいる「NPO 法人ふらっと南幌」の活動の現状を紹介しました。取組みのきっかけとなった故辻井達一博士の助言により、勉強会・研究会の機会を設けて多くの専門家・研究者の協力・指導を得ながら、関連官公署の事業との連携にも可能性を拡げつつ、幅広い活動に取り組んでいます。植物生態学の専門家だけではなく、地域に根差した活動を実践してきた住民主体のメンバー構成で、「湿原植生の再生・保全」だけではなく「活用」を含めた多様な活動をめざしているのが特色だと言えます。長期的・継続的活動の担い手・後継者の確保・育成、持続的活動を支える安定的財源の確保など、まだまだ多くの課題もありますが、メンバーそれぞれが描く夢の実現に向けて、地道にしかも楽しく活動を続けて行きたいと考えています。

はじめに

私たちは平成12年以来、地域のまちづくりに取り組む任意団体として、地域に埋もれていた歴史的資源「幌向駅通」や「幌向運河」を見つけ出し、再評価し、その価値を引き継ぐための活動を行なって来ました。平成21年には、より一層活発に活動できるように「特定非営利活動法人ふらっと南幌」（以下「NPO 法人ふらっと南幌」という）として法人化しました。近年では、地域の開拓と農業発展の歴史を学び、田園風景の美しさと自然環境の豊かさを歩きながら体感する仕組みとして「フットパス」にも力を入れています。さらに、地域の農家さんや地元の商工業者の活動と連携した「農都共生」の交流型観光や地場農産物の加工・販売による活動財源の確保の仕組みづくりなども研究を始めています。

そのような私たちですが、現在、「ほろむい七草」を中心とした湿原植生の再生・保全・活用にも取り組んでいます。今回本誌への寄稿の機会をいただきましたので、植物に関する専門家ではない私たちが、何故このような活動を始めることになったのか、どのように取り組んでいるのか、また、どのような思いで取り組んでいるのか、などについて紹介させていただきます。

1 「ほろむい七草」との出会い

私たちの活動のフィールドである南幌町周辺は、夕張川下流域をまたいで江別市から岩見沢市南部に広がるかつては幌向原野と呼ばれていた地域です。地域の成り立ちを勉強して行くうちに、開拓の歴史の中で、安全に暮らせる町を支える治水工事と農業の営みを可能にした農地開発によって、現在の町の姿が実現した一方で、失われたものもあることを知ることとなりました。その象徴的な存在が「ほろむい七草」なのです。

「ほろむい七草」とは、幌向原野で発見された7種の湿生植物種、ホロムイイチゴ・ホロムイクグ・ホロムイコウガイ・ホロムイスケ・ホロムイソウ・ホロムイツツジ・ホロムイリンドウのことをさす呼称なのですが、以前からある言葉ではありません。私たちの会が使い始めて以来、徐々に広がって来て、多くの方々に知られるようになりつつあるところです。

平成22年から23年にかけての私たち「NPO 法人ふらっと南幌」主催の数回のフォーラムと湿生植物学習会で、私たちが永年にわたってご指導頂いていた故辻井達一先生から、初めてその存在をお聞きしました。

その時に、辻井先生は、館脇 操先生が「群落生態より見たる石狩國幌向泥炭地」（館脇 1928）

および「石狩幌向原野植物(Ⅰ)(Ⅱ)」(館脇 1931)において、これら7種の和名を紹介されたということをお話しされました。そして、幌向原野には明治の開拓初期から幌内炭鉱の石炭輸送のための鉄道が敷かれており、札幌圏からのアクセスが容易であったことから、明治～大正期にかけての湿原植物研究の重要な調査拠点となっていたことが、その背景にあるようだという見解もご披露されていました。さらには、和名の制定の際に、主要な生育地域の地名を冠する例は珍しいことではないのですが、一つの地名が7種もの植物種に冠される例はきわめて稀なこと、そして、現況では、ほとんどの種が絶滅危惧種・絶滅危急種・希少種となっている状態であることも、教えていただきました。

「ほろむい」という地名が冠されてはいるのですが、ここでしか見られない地域固有種であることを意味する訳ではありません。石狩川の後背地に形成される泥炭湿原の特徴である保水力のあるミズゴケ類の群落を基盤とした環境に生きてきた植物たちなのです。同じような環境が保持されている道内の湿原では、今もその姿を見ることができます。しかし、開拓の歴史の中で、農地開発とそれに伴って多くの人々が住むようになった地域の防災のための治水事業によって乾燥化が進んだ石狩川流域では、「ほろむい七草」をはじめとする湿原植物は、その生育環境を失うことになり、次々と姿を消して行きました。そして今では、流域に残存している湿原・湖沼群の周辺や一部の水路近辺・低湿地帯などに細々と生き残っている状態となっています。

2 取組みのスタート

2.1 「ほろむい七草」の会の発足

辻井先生のお話は、地域の歴史や特有の資源を活かしたまちづくりに関心の高かった私たちに大きな反響を呼び起こしましたが、同時に地元にとって非常に縁の深い植物でありながら、今は地元でその姿を見ることができないことに失望を味わうことになったのも事実でした。

その後、地域のむかしの姿や開拓の歴史に関係の深い植物種があったことに感銘を受けた有志が集まり、様々な議論を進めて行く中で、これら7種の再生・保全・活用に挑戦するプロジェクトが立ち上げられました。今思えば素人故の無謀さで大それたテーマに関わることになってしまったのですが、私たちにとっては胸のときめく“夢へのチャレンジ”だったのです。機会あるごとに集まっ



Rubus chamaemorus L.
バラ科
ホロムイイチゴ

■希少植物(緑の国勢調査 1976)



Carex oligosperma Michx. subsp. *tsuishikarensis* (Koidz. et Ohwi) T. Koyama et Calder.
カヤツリグサ科
ホロムイクグ

■絶滅危惧II類(NRL)
■絶滅危惧種(北海道 RDB 2001)



Juncus tokubuchii Miyabe et Kudo.
イグサ科
ホロムイコウガイ

■絶滅危惧 I B類(NRL 2012)
■絶滅危惧種(北海道 RDB 2001)



Carex middendorffii F. Schmidt.
カヤツリグサ科
ホロムイスケ



Scheuchzeria palustris L.
ホロムイソウ科
ホロムイソウ



Chamaedaphne calycula (L.) Moench
ツツジ科
ホロムイツツジ



Gentiana triflora Pall. var. *japonica* (Kush) H. Hara f. *horomuiensis* (Kudo) Toyok.
リンドウ科
ホロムイリンドウ

■希少種(北海道 RDB 2001)



写真1 活動財源確保のために
作った絵はがきセット

ての議論の中で、この取組みをさらに強力に進めるには「わかりやすく覚えやすい呼び名があった方がよい」ということで検討した結果、「ほろむい七草」の愛称で呼ぶことにしました。そして、その再生・保全をめざす「ほろむい七草の会」が、「ふらっと南幌」のメンバーをはじめとして辻井先生による勉強会に参加されていた湿原環境に関する専門家・研究者の方々にも参画頂いて自然発生的に誕生しました。

これらの専門家の方々のそれまでの研究活動の中で、新夕張川河川敷の泥炭採取跡地で、偶然も重なって保水状態が保たれる状態になっている古い地層に眠っていた種の中から条件に適合した植生が再生し始めている箇所が見つかりました。そのような失われた植生の再生の可能性が報告された時期とも重なったことから、一見無謀に見えた私達の挑戦が、それなりの現実味を帯びることになったというタイミングの良さもあったと言えます。

活動を始めるにあたって、私達の考え方を多くの方に伝えると同時に、活動財源の確保のためにアーティストすみたまきこさんのご協力を得ながら「ほろむい七草」をテーマにした絵はがきセットを作成して販売することとしました。

それ以来、自然再生に関する様々な催しの機会をとらえて、「ほろむい七草」の愛称をピーアールし続けて来た結果、シンプルで響きの良い呼び名であったことにも助けられて、短期間のうちに関係者の間に定着して来ました。

2.2 辻井先生の遺された教えの幅広い意味

全くの素人集団である私たちへの辻井先生のア

ドバイスは、植物のことだけではありませんでした。現在の豊かな農業や安全な居住を可能にした開拓の歴史の流れとそれに伴う環境の移り変わりなど地域のたどって来た姿を記録し、後世に伝えることの大切さについてもお話しされました。環境の保全だけでなく、その環境を背景として育まれた地域の生活文化にも目を向けることなど、湿原の持つ意味についての幅広い考え方を含んでいたのです。それまでフットパスや都市と農村の交流など、地域おこしに軸足を置いて活動してきた私たちは、「湿原植生」の再生・保全とともに、それを活用して多様に取り組んで行く大変魅力的でユニークな地域活動のヒントをいただいたのでした。

2.3 「ほろむい七草」の再生・保全・活用にかける夢

私たちの活動には、湿原植生の再生・保全だけではなく、重要な条件として、その活用が含まれているのです。地域ならではの環境がもたらす地域資源としての「ほろむい七草」を、様々な形で経済活動にも結びつける将来像を私たち共通の「夢」として描いています。例えば、「薄紫の花が美しいホロムイリンドウや白い可憐な花が咲くホロムイツツジなどは切り花や鉢植えでの出荷を」、「赤い小さな実がなるホロムイイチゴは、ジャムやリキュールへの加工を」など、いろいろな活用のかたちが考えられています。

「幌向」という地名に由来した他にはない固有の魅力を持った地域資源としての強みとともに、「失われたものの再生・復活」という物語性をも備えていることから、地場産品としての強い競争力を持ち得るのではないかと期待しています。

2.4 湿原環境のワイズユース（賢い活かし方）のモデルのイメージ

素人集団ながら少しづつ勉強して行くうちに、「ホロムイイチゴ」は、北欧諸国では「クラウドベリー」と呼ばれていて、毎年、夏に家族中でバケツを持って森に出かけて大量の実を採取して持帰り、ジャムや肉料理のソース、果実酒などに加工して長い冬に備えるのが国民的行事になっているということも知りました。フィンランドでは、2ユーロの硬貨にはクラウドベリーが刻まれており、郵便切手にもなっていて、クラウドベリーの絵はがきがたくさん売られているくらいに有名で身近な存在のようです。

北欧への旅行者のお土産として、クラウドベリーのジャムやリキュールが人気商品となってい

るそうです。さらには、薬効成分も含まれているようにサプリメントや化粧品の材料に使われている例もあることなどから「ホロムイイチゴ」の栽培とその加工に関しても、それなりの可能性があるのではないかと期待しているところです。

辻井先生からは、湿原環境のワイズユースの視点から、再生・保全の学問的・研究的アプローチと、その成果を活用した栽培・加工的アプローチ、さらには体験型フットパスの中に環境学習を組込む等、環境活用的アプローチをきちんと使い分けて進めてはどうかという、先生ならではの柔軟で現実的な助言で強く後押しして頂きました。

3 「ほろむい七草」の再生に向けての準備

絶滅しかかっている植物種の再生・保全は決して容易ではありません。ましてや、それらを栽培し、収穫したものを加工・販売できる程の量を確保するには、まだまだ、多くの課題があります。しかし、一方では、生前の辻井先生にご指導を受けられた多くの研究者や専門技術者の方々による取り組みの成果で、可能性も見えはじめています。「ほろむい七草」の7種全てが、石狩川下流域の幌向湿原地域内の乾燥化や開発が進む厳しい環境の中で、細々と、しかし、したたかに、各所で生き



写真2 フィンランドの2ユーロ硬貨



写真4 試験栽培用に準備中のホロムイイチゴの苗



写真5 ホロムイイチゴの実（美唄湿原にて）



写真3 クラウドベリーのジャム



写真6 採取した標本で試作したリキュール

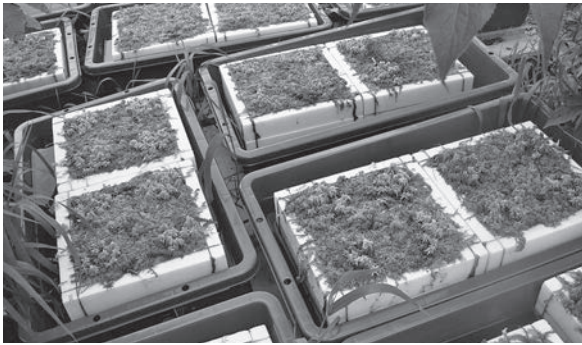


写真7 星教授から学んだミズゴケ栽培ユニット



写真8 卓上で試みたミズゴケ栽培の楽しみ

残っていることが確認されたのです。「幌向湿原」由来の遺伝子を有する「ほろむい七草」の再生のために、これらの残存地の所有者・管理者や国の機関等の正式の許可を得て採取させていただいた標本から、試験栽培のための苗の準備が進んでいます。

これらの湿生植物栽培のために必要なミズゴケ基盤についても、これまた辻井先生のご紹介によって、この分野の先進的研究者（東海大学農学部応用植物科学科星良和教授）のご指導によって、徐々に可能性が見えつつあります。星先生に快く伝授頂いた独自のシステムを応用しながら、幌向湿原地域内のミズゴケ類の残存地を管理されている国土交通省北海道開発局江別河川事務所のご協力で試験栽培用の苗をご提供頂き、「NPO法人ふらっと南幌」関係者と研究者の協力体制によって、一定量の試験栽培が管理地で進行中です。

4 多くの人々の連携・協力が 生み出す可能性

「ほろむい七草の会」スタート当初は、「ふらっと南幌」が南幌町から借り受けていた町有地（かつて教育委員会で湿原再生をめざして確保されていた用地）や NPO 関係者から提供できる可能性

があるとされていた農地等が再生試験地の候補として考えられていました。しかしながらそれらの用地は、規模的にも限られている上に、既にかかなり乾燥化が進んでいる状況で、それらの土地を湿原状態に戻すことには多くの困難な課題があり、苦慮していました。

そのような状況の中で、平成 25 年度から始まった北海道開発局札幌開発建設部による「石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ」の取り組みが始まりました。そこでは、北海道における湿原植生と湿原環境再生に関する研究実践を永年にわたって進めて来られた札幌市立大学デザイン学部の矢部和夫教授を座長として新夕張川河川敷や千歳川遊水地等での自然再生の実施計画が検討されてきました。その中では、北海道開発局・北海道空知総合振興局・南幌町などの関連官公署と大学・試験研究機関の研究者・専門家と「ふらっと南幌」をはじめとする民間活動団体などが連携・協力して自然再生に取り組む具体的道筋が準備されつつあり、今後の取り組みに向けての可能性の広がりが出てきました。

上記の実施計画の中で位置づけられた私達の役割は、「現地環境の定期的、持続的な記録・観察・報告・情報発信」、「試験地の維持・管理、観察会などの現場運営・サポート」、「フットパスなどを通じた現地観察や体験学習などの実施」となっています。植物生態学に関しては素人集団ではありますが、地域に根ざした活動をしている団体として一定役割は果たせるのではないかと考えています。

また、私たち「ふらっと南幌」の NPO 法人として取り組みの内容が評価されて、平成 24 年度、25 年度に湿原環境再生の視点から北海道環境財団の「e-水プロジェクト」に採択されました。さらに、平成 25 年度、26 年度には、湿原植生の栽培と活用の方向性が地域資源を活かした新しい農業の姿をめざす取り組みとして農林水産省の「都市農村共生・交流総合対策交付金」の対象として助成を受けることができ、様々な課題解決のための技術的検討や試験栽培に必要な資材などの準備に要する費用に対する一定の財源が確保されて活動することができました。

5 「ふらっと南幌」らしい 活動のひろがり

「ほろむい七草」をテーマとした私たちの取り組みは、自然環境だけではなく地域の農業や歴史・文化とも結びついた幅広い活動となっています。そ

して、そのことによって思い掛けない展開の広がりを見せています。

そのひとつは、フットパスを中心にした交流・体験型観光のケーススタディとして「ふらっと南幌」のフットパス活動を取り上げた北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の院生O君が、卒業後に「NPO 法人ふらっと南幌」の事務局に参加してくれたことです。彼は、私たちのNPO法人理事の佐藤正一さんの下で有機農業の研修生と事務局を兼任しながら、最近の若者らしくパソコンやインターネットを駆使して「ふらっと南幌」の活動を活性化してくれました。「ほろむい七草」に関しても、北海道大学の図書館の膨大な資料を調査し、北海道博物館の学術標本を確認するなど、それまで曖昧だった「ほろむい七草」に関する学問的資料の確認作業の一端を担ってくれました。その主なものとして、

- 明治18(1885)年に宮部金吾博士により「Horomui (幌向)」にて採集され、「*Rubus chamaemorus*, L」(ホロムイイチゴ)と同定された当時の標本が今も北海道博物館に所蔵されていること。
- 幌向原野はその後、大正～昭和期にかけて農地化によって範囲が減少していったのですが、残されている各年代の地図によって、その変遷を辿ることができること。
- そのような状況の中で、宮部博士の後を継いだ館脇博士が、幌向原野の植生消滅を危惧して、昭和6(1931)年に「ほろむい」と名を冠する7種類の植物を含む目録「石狩幌向原野植物(I)(II)」(館脇1931)を発表されたこと。
- 「群落生態より見たる石狩國幌向泥炭地」(館脇1928)に記載されている「ホロムイ」という名を冠する7種類の植物について、北海道大学総合博物館「陸上植物コレクション 北海道産雑官束植物標本」にこれらの植物標本を求めることができること。

といったことをO君が私たちに情報提供してくれたのです。

館脇博士は、私たちのご指導頂いていた故辻井達一博士の恩師にあたりますので「幌向」を巡る不思議なつながりのご縁を感じます。

もうひとつは、ホロムイイチゴを詠われた昭和天皇の御歌との出会いです。

「雨はれし 水苔原に枯れのこる
ほろむいイチゴ 見たるよろこび」

というのがその御歌です。まさに、私たちが「ほろむい七草」を求めて訪れたニセコ鏡沼やサロベツ原野、松山湿原等全道各地で目にしたホロムイ



写真9 私たちがニセコの鏡沼で見た状況
"水苔原に枯れのこるほろむいイチゴ"

イチゴの生育環境の状況が詠み込まれています。生物学研究者として知られ、「雑草という草はないのです…」とい深い意味を持った名言を残されている昭和天皇ならではの的確な表現です。

この御歌が天然記念物赤井谷地湿原(福島県会津市湊町赤井字北浅ノ原)にある歌碑に記されているという情報は、平成26(2014)年に思い掛けないルートから提供されました。私たちが取組んでいるフットパス・ウォーキング活動の一環として行なった「千歳～南幌～札幌の100kmのロングトレイル」の埼玉からの参加者が後日それを教えてくれたのです。このロングトレイルは、千歳空港から札幌の北海道庁旧本庁舎「赤レンガ」をゴールとして10月11日から15日の5日間にわたって4泊5日で踏破するコースでした。その長い道中の道すがら、「ふらっと南幌」の近藤ガイドから「ほろむい七草」の話しを聞かれたF氏が強い関心を持たれ、お帰りになった後に、インターネットで精力的に検索されてこの御歌の歌碑があることを発見されました。

「赤井谷地湿原沼野植物群落」は、昭和3(1928)年に国指定天然記念物となったのですが、特にホロムイイチゴの最南の分布地として貴重な存在となっているそうです。昭和天皇・皇后両陛下は昭和36(1961)年と昭和59年にこのイチゴを観察されたそうですが、昭和37年の御歌会の際にご披露されたそうです。地元の案内板には同年の歌会始で天皇陛下が詠まれたとなっているようですが、実際はやや異なっているようです。私たちのその後の調べでは、新年に御題による御歌を詠まれる「歌会始」ではなく、毎年天皇陛下が訪問された各地に因んで御詠みになった御製の歌をご披露される御歌会の行事の際にご紹介されたようです。北海道では支笏湖の御歌が長崎県の雲仙や福島県の磐梯吾妻スカイラインなどとともに挙げられてい

ます。

私たちが深い関心を寄せているホロムイイチゴに関して昭和天皇が御詠みになった歌との出会いが私たちのフットパス活動から実現したのは、「NPO 法人ふらっと南幌」ならではの劇的な出来事でした。

その他にも、私たちがフットパス活動を中心にホームページで発信している関係で様々な方々からコンタクトがあります。そして、そのご縁で「ほろむい七草」関連の活動が広がりを見せています。例えば、江別市越後沼で湿原再生に取り組んで来られたMさん、Sさん、新篠津ツルコケモモを守る会（仮称）準備会 事務局のSさん、北海道植物友の会のMさん、当別高等学校 園芸デザイン科の東穂公洋先生と生徒さん達、江別出身で新潟大学農学部のT君など多彩な方々との連携も始まっています。

6

克服すべき課題も多いが あせらずに着実に！

平成26年度からは、用意されたミズゴケ基盤と苗を活用して、「ほろむい七草」を中心とした湿生植物の試験栽培に取り組む予定でしたが、現状では、まだまだ課題も多く、「ほろむい七草」の育成技術は確立されていません。

基盤となる湿原環境の保全は、長い時間を要する持続的な取り組みが必要だと思えます。地域社会の中で、これらの湿原植生の再生・保全・活用を確実に引き継いで行くためには、幅広い世代の参画が必要とされます。

そのための仕組みとして、現在、地元の小学校の児童やフットパス活動を通じて御縁のできた当別高校の生徒さん達と一緒に取り組むための試みを始めています。子どもたちやその両親、その他多くの地域住民に「里親」になって頂き、珍しい植物を育てることを楽しみながら、同時に環境のことを、地域のことをしっかりと学ぶきっかけとなることをめざす「ほろむい七草里親制度」を段階的にスタートできるように現在準備中です。

しかし、一方では、前述の北海道環境財団の助成や農水省の交付金は継続的なものではなく、現在は私達の活動財源は非常に困窮しています。その限界はありながらも、NPOメンバーの献身的な努力や多くのボランティアの方々のご協力、そして民間企業のCSR（Corporate Social Responsibility：社会貢献活動）関連の寄付金・助成金などにも支えられながら、生き残った湿原植生の生



写真10 河川敷での湿原植生再生試験地の観察会

き残り方にも学びつつ、細々でも、しぶとく、したたかに取り組みを続けて行くつもりで頑張っています。

幸いなことに私たちの地道な活動ぶりを評価頂いて環境省や北海道開発局などからも様々な機会に、ご協力・ご支援のお声を掛けていただいています。河川協力団体としても認定いただき、前述の「石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ」の成果を活かしながら、夕張川河川敷における湿原植生再生の地元の担い手としての位置づけもいただきました。たいへん心強く思うと同時に、目標成果の達成に向けての責任を痛感するとともに、今まで以上に心を引き締めて活動していくことが必要であると強く感じています。

私たちが続けている試みを通じて「ほろむい七草」の育成・栽培に必要な条件が整ってくれば、さらに大きな用地への移植によって、より本格的な「湿原環境の再生・保全、そして活用」への道が開けることを信じて、「夢」の実現に向けて、日々取り組んでいるところです。

引用文献

- 館脇 操 (1928) 群落生態より見たる石狩國幌向泥炭地. 札幌農林学会報, 19, 531-563, 札幌農林学会.
- 館脇 操 (1931) 石狩幌向原野植物目録 (I). 札幌農林学会報, 23, 60-83, 札幌農林学会.
- 館脇 操 (1931) 石狩幌向原野植物目録 (II). 札幌農林学会報, 23, 103-134, 札幌農林学会.
- 宮部金吾 (1895) 「北海道泥炭地植物目録／幌向泥炭地植物」 恵林 17, 29~35, 學藝会.

濱田 暁生 (はまだ あきお)

1968年北海道大学大学院工学研究科建築計画専攻修士課程修了後、大学講師、建築設計事務所等を経て現在はまちづくりプランナーとして活動中。代表理事を務める NPO 法人ふらっと南幌の活動の中で湿原植生の再生・保全・用にも関わる。